

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第9回



松村博

元大阪市都市工学情報センター

今回は橋の都大阪市橋梁課で数々の名橋を設計され、橋に関する多くの著書もある松村博さんにお話ししました。文化の都関西の香りがする3冊です。

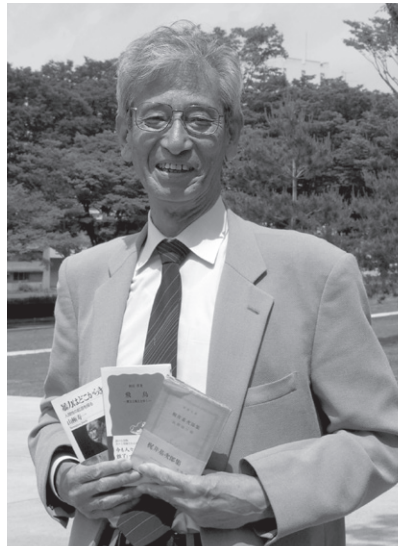
ま

ずは「飛鳥」。著者の和田 萃氏は、京都大学の考古学クラ

ブの同級生とのこと。松村さんは大
学時代、遺跡の発掘にのめり込み、各
地の調査に参加されていた。歴史学
を専攻する和田氏をはじめ多様な分
野の学生が集まり、嵯峨野の古墳群
の調査報告書をまとめる。それは松
村さんにとって、本をつくる面白み
の原体験ともなった。和田氏とは飛
鳥をとともに歩くこともある。「飛鳥」

は飛鳥を歩く人のための格好の案内
書である。古代史の本にままたる誇
張を退け、淡々と歴史の流れを綴っ
ている。そして著者はほとんどの発
掘現場に立ち会い、実際に歴史の舞
台となった場所を歩き、そこに立つ
て風景を眺めている。文献史学と考
古学の融合を目指す著者の研究姿勢
がリアリティを生み出している。そ
れがこの本の魅力とおっしゃる。

次いでサルを研究対象とした多く
の書籍の中
から「暴力は
どこからきた
か」。京都大
学は霊長類研
究の核でもあ
る。サル学に
のめり込む人
も身近に見



MATSUMURA Hiroshi

1944年大阪市生まれ。京都大学修了後大阪市に勤務。神崎橋、川崎橋他の設計と都市計画などを担当。著書に「大阪の橋」「日本百名橋」他多数。

の書籍の中
から「暴力は
どこからきた
か」。京都大
学は霊長類研
究の核でもあ
る。サル学に
のめり込む人
も身近に見

た。サルの研究は結局は人間とは何
か、を考えさせる。その草分けの今西
錦司のすみ分け論に始まり、生き物
が集団でいるための知恵と性質を追
う。その延長でこの山極寿一氏の著書
では、サル社会における暴力に注目す
る。食べ物よりも性(繁殖)を巡る競
争は激しく、抑制のタガが外れた時に
子殺しなどの悲劇が起きる。そして人
間にとっては家族の存在が、共同体間
の暴力の源になっているのではない
かと説明している。興味深く読みなが
らも、松村さんは昨今の不可解な殺人
事件などを思いつつ、人間の原罪とし
ての暴力は、いくつもの進化の段階で
刷り込まれてきた、より多層的なもの
ではないかと考える。

最後の一冊は迷われた末に「檸檬
」。この梶井基次郎の代表作を含む
作品集をハイティーンの頃に初めて
読み、その年頃のぴりぴりした感覚
と呼応した。デカダンスやドラマチッ
クなできごとに依存した私小説とは
異なり、日常の観察を研ぎすますこ
とで生まれる新鮮な印象に心惹かれ
たとおっしゃる。梶井の書簡集など
にも目を通し、その筆力に憧れ、ご自
身が文章を書く際にもまねてみたり。
日常を描きながらもそれを読ませる
のが作家の力量ではないかとおっ
しゃる。
いずれも知と表現において、静か
でありながらも深い本である。こう
した世界に若くして魅了されたこと。
松村さんのデザインされた橋のセン
スの源をかいま見たように思った。

飛鳥
—歴史と風土を歩く—
和田萃：
岩波新書、2003年

暴力はどこからきたか
人間性の起源を探る
山極寿一
NHKブックス、2007年

檸檬
れもん
梶井基次郎
新潮文庫 ほか